
ダメな勇者が旅立つことになった (DQ)

ダメな勇者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ダメな勇者が旅立つことになった（DQ）

【Nコード】

N24640

【作者名】

ダメな勇者

【あらすじ】

16歳の誕生日を迎えた一人の内気な少年は、4人のパーティーを結成し、魔王を倒しに行くお話し。

勇者視点でお話が続きますので、どうか温かい目で見守ってあげてください。

勇者」()・()・()・() (前書き)

この小説はドラクエのお話ですが、実際にゲームのなかにある場所や名前はほとんど出てきません。
作者自ら考えた地名ですのでよろしくお願いします。

勇者」(、・・・)(」

(、・・・)(今日は16回目の誕生日

真昼の13時におきた俺は、リーザス村の宿屋の息子。

親父「やっとおきたか、王様が呼んでるぞ。」

そつだ、ここの村は16歳の誕生日を迎えると王様の助言(命令)により魔王を倒しに旅立たなければならぬ。

とうとう家での寄生虫生活から離れるのか・・・。

配布された着慣れない勇者の服を着て、表玄関を空ける。

うっ・・・日差しがまぶしすぎて溶けそつだ。

玄関のドアを閉める瞬間、父親の祝福の奇声が聞こえた。 ああ・・・

・うぜえ・・・。

村を歩くと、村人の顔が俺を見て不思議そつな顔を知っている。

おいおい、俺もこの村の1人だぞ。

・・・まあ5年も家から出たことがなかったから、村人が俺の顔を覚えていないのも当然である。

それにしても久しぶりの外だ・・・まるではじめてきた村のようだ。

ドコ)・・・(ドコ

王宮につくと、王宮の兵士に導かれ王座の間にやってきた。

王様は俺を見るなり、

王様「少年よ！ 今日から君は新たな世界へと旅立つ、一人の勇者となるのだ！」

王様は俺がニートだったことを知っているのですそのせいか、とてつもなくイヤミに聞こえる。

・・・王妃は顔が引きつっている。

ここはグツとこらえ、お金をもらうまで耐え続けた。

その後、300Gをもらった俺は少し機嫌を直し、痰を吐き捨てこの王宮から出て行った。

さて、勇者として最初によるべきなのは酒屋だ。そこで仲間を見つけることが普通だが、

まずは己のレベルを上げよう。一人で戦うことで経験値がかなりもらえるからな。

俺はさつそく180G使い、薬草を30個買い占めると村の外へ、旅立った。

村から出たことのない俺は、未知なる世界のなかでレベル上げに没頭した。

やはり一人だときついが、順調にスライムを倒していく。

スライム以外ができれば即座に逃げる。そして、薬草を使う。

このループが七日間続く。

レベル8に到達したころ、そろそろ先のダンジョンに進もうと思い、まず三人の仲間を揃えるため、酒場に向かう。

酒場のオーナーはマノアという女であった。ルックスはまあまあ。

さつそく仲間選びを考えたが、ほとんど良いメンツが揃っていない。マノアさんが言うには、最近「勇者渡り」という時期だったらしく、約30人ほどの少年が

勇者として旅立ったらしい。人気の職業は全部持っていかれ、今はほとんど在庫切れだそうだ。

つまり、俺はあまりものしか選べないということか・・・ 悲しいけど俺、負け組みなのよね。そして悩んだ末選んだのが

武道家 盗賊 遊び人

の三人。

後先不安なメンツだがそんなことは気にせず、俺は酒場を後にした。すっかり忘れていたが、俺らの冒険の目的は魔王ゾーマの世界征服という野望を阻止することだ。

あちらこちらで起こる魔物による被害から人々を助けるため、この世界を回れとの命令を王様からうけている。

簡単に言うとボランティアだ。

ボランティアならユニセフに任せればいいのに。

そんなことを言っていたらきりが無い。無駄口はよそう。

新しく仲間になった三人はまだこのパーティーに慣れてないらしく、口数も少ない。

武道家はマジメなやつで、俺が戦っている姿を見るなり

武道家「自分、勇者さんみたいに強くなりたいっす！」。+・(。
・) + ・ 武道家

といつてくる。正直いつてあつかましい。

盗賊はすばやさだけは早いけど、これといった特徴がない。

遊び人は自分のペースで戦いに参加してくれている。ルックスは二流、だがナイスバディ。

そんな三人の仲間とで今ポルン村に向かっている。
さすがに三人も仲間がいると心強いが、薬草の減り具合が激しい。
遊び人よ、早く成長してホイミをおぼえてくれ。

その名は「おおきうち」(前書)

おおきうちかわいよおおきうち

その名は「おおきづち」

三日間かけてポルン村にたどりついた。　どうやらここは魔王の手はおよんでないらしい。

さっそくたまったお金で薬草を買いにいこうとしたところ、その村の道具屋は一年に一度しかひらかないらしい。なんでもその商人が昔、宝くじドリー　ジャンボで100000000Gを当てたらしく、

商売を放棄して遊びつくしていたのこと、気が向いたらお店を開くというような感じになっているらしい。

くそ、なんともうらやましい……。今すぐギラでこの店を燃やしたいところだ。

しかたなくその村で一泊休んだ後、またポルン村からリーザス村に行くことになった。

リーザス村からポルン村まで行くのに三日かかったものが、二日で行けるようになっていたので、自分がどんどん強くなっていることをあらためて実感した。

だが途中での戦闘で一角ウサギの痛恨の一撃で盗賊は倒れてしまった。

リーザス村についた俺たちは最初に教会に寄り盗賊を生き返らせてあげ、その後お店に薬草を買いに行ったのだが、そこで問題が発生した。

……盗賊がカメラの翼を万引きしてしまったことである。そしてよりもよって店員に見つかったことである。

店の奥で事情説明を聞かれているとき、俺と武道家と遊び人は盗賊

をけなすような目で直視していた。盗賊はずっと下を向いたままである。盗賊の癖に……万引きでみつきかりやがって……。

王宮の兵士に連行され王様からみっちりしごかれた後、俺らは村中から軽蔑のまなざしを

直視されながら村を後にした。(王妃のあの憎たらしい顔が今でも脳裏にしみついている)

人気の少ない森に入った瞬間、盗賊を縛り上げた。

盗賊「すいやせん！勇者さん！！もう二度とこんなことはしやせん！！！！」

俺はこいつにメラを打ち込んでさらし上げようと思ったが、その前に盗賊になぜ「キメラの翼」を盗んだか聞いてみた。

話によると、ポルン村からリーザス村に帰ってくるときの一角ウサギの痛恨の攻撃がトラウマになったらしく、またリーザス村からポルン村に行くときに一角ウサギにあわないようにと思いついた。

キメラの翼を盗んだらしい。哀れな奴め。俺に言えば買ってあげたのに。

俺らはまたポルン村に足を運んだ。

相変わらず盗賊は一角うさぎが出ないかビクビクしていた。

そんな盗賊の姿を見て武道家は俺に

武「勇者様、本当にこんなやつが仲間がいいんですか？」と聞いてきたが俺はスルーした。

無事にポルン村についた俺たちはお金に余裕があったので武器屋に立ち寄ってみることに

まず俺にブーメランを買い武道家に鉄の爪を、遊び人にはまどうしの杖を買ったあげた。

だが盗賊、テメーだけはだめだ。

俺たちは手分けしてこの村の住人から魔王　ゾーマの情報を探ることにした。

一時間後、盗賊がすばらしい情報を持ってきた。

盗「先週、この町から北の方角のほうで魔王ゾーマの手下が山を焼き払ったらしく、その地に新しい隠れ家を作っているらしいです。」
盗賊GJ！　褒美に「たびびとの服」をあげよう。（俺のお古）
盗賊がなにか不満そうな顔をしていたがきつと喜びの顔と見間違えたのだらう。

さつそく俺たちはポルン村を後にし、ゾーマの手下を倒しに行くことにした。

ポルン村から半日で目的地に着いた。

薬草も充分ある。これならいけるな。

そう確信した俺だったが、予期せぬモンスターと出くわしてしまった。

かわいい見掛けによらず、ドでかいおおづちを振り回してくる「おおきづち」というモンスターと戦った。

はつきし言ってこいつの攻撃力は今の俺たちのレベルではG級に値する。

攻撃のヒット率は低いものの、クリティカルが出ればほぼ一撃。

見かけで判断し相手を見くびっていた武道家は、

武「そのボウズ、俺の顔に一発打ってみなww」

その言葉が武道家の遺言となった。

武道家がいなくなった分ダンジョンでの戦闘はかなり苦戦したものになった。

一回ダンジョンから抜け出し、ポルン村に戻ってきたボロボロの俺たちは宿屋で体を休め、次の日に教会へ行き武道家を生き返らせた。武「すみません勇者さん、自分が調子に乗ったせいで・・・」

ああまっただ。おかげで120Gも使わせやがって。

そのとき盗賊は武道家に勝ったかのように、顔に笑みを浮かばせながら

ブロンズナイフを磨いていた。

準備もとのり、今回は作戦を立てての上で再出発した。

目的地のダンジョンに突入した瞬間、例の「おおきづち」があらわれた。

しかも6体！

だが今回はバツチリ作戦を立ててある。

作戦はこんな感じだ。

- 1、死んでもさほど影響のない盗賊をおとりにする。
- 2、隙を見てすぐさま逃げる。
- 3、しばらくたって盗賊の棺桶を回収。

見事に作戦が成功した。

これで次に進むことができる。

(盗賊エ……)

俺たちは少しずつだったが確実にダンジョンを制覇していった。

そしてついに魔王ゾーマの手下のアジトの奥地までたどり着いたが驚くべきことが

待ち受けていた!!

盗賊エ・・・

なんとゾーマの手下らしきモンスターが丸焼けで倒れていた。あたりも丸焦げになっている・・・これはどういうことなのか？するとさつき襲い掛かってきたおおきづちが現れた。

すかさず俺たちは戦闘態勢をとったが、奴らは攻撃してくる気配はなかった。

なにやら俺たちに話したいことがあるらしく、ここはおとなしく耳をかたむけた。

おおきづちはなぜこのゾーマの手下「のボス」が丸焼けになっているのか話してくれた。

なんでも、このゾーマの手下（でんでん竜というらしいが・・・）そいつは大の大酒のみらしく、

俺らが来る半日前まで酒を飲み散らかしていたらしい。そこで眠りコケつい誤ってくしゃみをしてしまい、火の息で大量の酒に引火。

あたりは燃えまくったらしいが、なんとでんでん竜は酔っ払っていたのできづかずに眠ってしまいそのまま永眠へとつながったんだと。それでこの有様らしい。俺たちはここに何しに来たのだろうか。

俺たちは戦わずして勝てたので一瞬ホッとしてしまったが、ボスの倒したときの大量の経験値と

ゴールドが手に入らないと思った瞬間、残念な気もした。

その後、俺たちはおおきづちからゾーマの行方や情報を聞き出すことに成功した。

ん？ どうやって聞き出せたかって？

そんなこと気にしてしまったら負けですよ。

見せられない状態となったおおきづちを後片付けして、

さっそく俺らはここを後にし情報によるゾーマがいる西のほうへ足を運んだ。

ああ・・・盗賊の棺桶が重い・・・。

西の方面を歩き続けてから二日目、俺たちは迷子になっていた。

(くそ、おおきづちから地図をもらっておけばよかった。)

今俺たちが食料としているのは薬草を煮込んで作ったスープだけで過ごしている。

さすがにこれ以上続くと精神面が崩れてしまう。

ああ、肉が食いたい・・・。

すると俺たちの目の前に「暴れ牛鳥」が現れた！

ほう・・・牛と鳥の肉か・・・。ゴクリ。

俺たちはそいつを生け捕りにしようと思ったが、なかなかすばやくそ、薬草だけの生活だったのでろくに栄養が足りない。おまけにイライラしてくる。

むしゃくしゃしたので、おもいつきし盗賊の眠っている棺桶を蹴り飛ばした。

それがなんと暴れ牛鳥の命中！ 相手が気絶している隙に牛鳥を武道家が匠にさばいた。

俺たちは久々に肉というものを腹の中に入れる。 武道家はうれし涙を流していた。

遊び人はまるで男のようにガツガツ食っている。

まあみんなそれだけ食事に植えていたのだろう。そう考えると盗賊がかわいそうな気もしたがコイツがいなかったおかげでたくさん食べれたと思うと、なんかどうでもよくなった。

しかし、さっき俺が盗賊の棺桶を蹴り飛ばしたときに、棺桶の中からすごい鈍い音が聞こえたような気がしたが・・・気のせいだろう。

歩き続けて四日目、とうとう俺たちは目的地アルカント城にたどり着いた。

なんと立派な城だろうか、神聖なオーラをびんびんに出している。さっそく俺たちは新しい装備を備えて気持ちを切り替えた。防具を買った後、おつりが少しあったのでかわいそうだからしかたなく教会にいつて盗賊を生き返らすことにした。

盗賊を生き返らすために棺桶を空けた瞬間、俺たちは言葉をなくした。

盗賊がとんでもないことになってる……。

え？なにこれ？ 間接が曲がっちゃいけない方向に曲がってるよww 俺たちは盗賊の死体から目をそらしながら教会で盗賊を生き返らした。

すばらしいことに生き返らすと体力と体の状態が完全回復していたので内心ホツとした。

盗「うう……なんだか体がぎこちない……」

……そうでもなさそうだ（笑）

さっそくアルカクタ城付近でゾーマについての情報を探索した。

一時間後、みんな集まったがそれといった情報がつかめず、その日は体を休めるということで、みんなに時間をあげた。

ただし盗賊、テメーはだめだ。

盗賊と俺はアルカクタ城から離れ、野生のモンスターを倒しに行つた。

なぜこんなことをするかというと、盗賊のレベルアップのためである。

盗賊が死んでいる間、俺らはずいぶんとレベルがあがった。表であらわすと……

勇者（俺） L V 1 9

武道家 L V 1 7

遊び人 Lv17
盗賊 Lv11

これはひどいと思ったので、さっそく盗賊強化訓練を始めた。
（ついでにゴールド稼ぎにもなるということで一石二鳥というわけだ）

その日は丸々一日戦いつづけた。さすがに俺もクタクタだ。
盗賊は死んだ魚のような目をしながら俺についてきた。 キメエ・
。。。

しかしその分の成果もちゃんと出ており、Lv11だったのがLv18と武道家たちを超えていた。 盗賊の武道家に対するコンプレックスのおかげでここまでやれたのではないかと思う。

その後、体を休めるために宿屋へ向かいぐっすり熟睡した。

（ちなみに、この一日で稼いだ金は俺の新しい武器を買うために使った。）

そして次の日、俺たちは宿屋の前で合流した。

のろい(前書き)

なんか意味不になった

のろい

合流してからまた俺たちはゾーマの情報を得るために、街の人々から聞きだすことにした。

今日は遊び人が風邪で寝込んでいるので三人で手分けすることになったのだが、

武道家が盗賊のレベルを見た瞬間、まるで体が形象崩壊するように落ち込んでいた。

街で搜索すること十五分後、俺たちは一回休憩をとることにした。

この街はでかい上に、裏道もたくさんあるため迷ってしまうこともちらほら。

はあ、今日も収穫ゼロかな・・・と思った瞬間、俺の脳裏に何かが駆け巡るような感覚がしたあと俺は意識をなくした。

・・・。

？「東ノ・・・月ノ・・・祠ア・・・。」

暗闇の中に何かが照らされている・・・。道化師か何かが踊っている。

近づこうとしているのに、近くに寄れない。

？「マダ・・・君デハ・・・。」

……無理ダ。」

その言葉を聞いた瞬間、武道家と盗賊の声が聞こえた。

武道家「勇者さん！！　しっかりしてください！！　勇者さん！！」

盗賊「大丈夫でゲスか！？　勇者さん！！」

俺「んん……あと五分……」

武「勇者さんが起きた！！」

……ん？　なぜか俺の服がビショビショになっている……。
なんで……噴水に入ってるんだ？

俺は周りの状況を把握しきれずにただ、ボーっとしていた。

武道家と盗賊は俺が眠っている間のことを全て話してくれた。
話によると俺が急に倒れこんだ後、俺を抱えてすぐさま近くの宿屋
に入り込んだ。

しかし、俺が昨日、新しい武器を買ったために、ゴールドがなかつたので困ったところ、

盗賊の旅人の服との交換を条件に何とか休むことができたらしい。
その後、宿屋の主（マノアさんの妹らしい）に看護を頼んだころ、
主は、

主（妹）「やだっ！？　この勇者さん、呪いにかかっているじゃない！　今すぐ教会に行ってください！」

その言葉を聞き、あわてて教会へ移転。
その時盗賊は裸だったので聖母さんに変態扱いされたく、説得するのに一時間ぐらいかかったらしい。

盗賊「変態じゃないよ！ 仮に僕が変態だとしても、変態という名の紳士だよ！」

あくまでも俺の勝手な妄想

しかし、俺に取り付いていた呪いはあまりにも強かったらしく、その場で呪いを解くのは不可能だったらしい。

そこで聖母さんの提案を出した。

この街の中央にある「聖なる噴水」に浸らせることで呪いが解けるかもしれない、というものだ。

そして俺を運び出し、街の中央の噴水に投げ込んだ結果が今の有様らしい。

なるほど……。

今回は武道家と盗賊に感謝しなきゃな。

俺は少し抵抗感があったものか、ぎこちない「ありがとう」を言った。

すると二人は頬を赤くしながら、ぎこちない「テレヤカサ」を見せた。

………気持ち悪い

しかし、なぜ俺は呪いにかかったのだろうか。

あの不気味な道化師はなんだっただろうか。

今日はいろいろなことがあったので、とりあえず宿屋に戻り休むことにした。

祠（前書き）

洞窟って怖いよね

祠

次の日

宿で二日ぶりの全員集合し、遊び人が復帰してきたのは良いのだが、コイツ・・・酒臭え・・・。

俺らが大変なめにあっている間、ずっと酒飲んでいたな。

というかお前まだ18歳だろ？ なに調子に乗ってるんだよ。

どこで酒代を手に入れたかは知らないが、とりあえず嚴重に注意しておいた。

さあ、どうやってゾーマの情報を探ろうか考えていた時、俺の頭にある言葉がよぎった。

勇者「東の・・・月の・・・、ほこら・・・。」

三人は（。。。）とした顔をしていたが、そんなことは気にせず、宿主に「東の月の祠」について聞いてみた。

しかしそんな祠は知らないと言いつつた宿主だったが、たまたまここを通りかかった商人が、

商人「あゝそれなら知ってるよ。でもただじゃ教えねえなあ」
「w」

その言葉を聞いた俺はその商人を宿の裏口に連れて行き、大人の対応で商人から知っていることを全て聞き出した。

（商人はおおきづちの二の舞となったのだ・・・）

商人の話によると「東の月の祠」というやしるの存在は知らないらしいが、ここから西にある「太陽の祠」というやしるが存在するらしい。

そこに行けば何かわかるだろう・・・。

そこで、この話についていけてない三人組に俺が眠っていたときの夢のことを簡略に説明した。

話を聞いた三人組は、わかったようなわからなかったような感じだったが、そこに行けば何かつかめるのかも知れないという事はわかったようだ。

さっそく旅の準備にとりかかったが、盗賊の装備があまりにも醜いことに気がついた。

盗賊（37歳）

（装備）

ヘルム 無し

鎧 無し

武器 石

さすがにこれだと、何も役に立てれないただのクズ（まあクズだけど）なので仕方なく装備を揃えてあげようと思ったが・・・ゴールドがない。

ふと俺の後ろの盗賊を見ると、

（；；；；）

こんな顔をしている・・・。

やめろ、そんな顔をするな・・・仕方ないんだよ・・・。

さすがに俺も同情してしまった。いつか盗賊に必ず装備を買ってあげようと思ったが、街を出ようとする前に、民家の棚をあさくつていたら旅人の服が出てきたので、それを盗賊に着させてあげた。その後、アルカクタ城をあとにした。

歩き続けてからわずか半日で、目的地「太陽の祠」についた。
ん？ やしろの前に女らしき人がしゃがみこんでいる。

どうしたのか聞こうと思ったが、めんどくさそうなのでスルーしながらやしろに入ろうとした瞬間、女の人が待ってくださいと話しかけてきた。

（わかっていたよ・・・どうせこれもゲームのシナリオ・・・以下略）

しょうがなく話を聞いてあげること。

どうやら友達と一緒に、地域のボランティア活動ということで行く周りを掃除していたところ、突如モンスターが友達をさらって行きこのやしろに入ってしまったそう。

助けを求めに行こうとしたところ足をくじき倒れこんでしまったそう。

・・・この話を聞きながらひとつ思ったことがある。

武道家がこの女に惚れている。

女が話している間、なにかと緊張していたうえ、アソコまでがバイキルトになってるじゃか・・・。（自重）

それはともかくまずこの女の足を手当てしてあげ、キメラの翼を一個貸してあげた。（あとでちゃんと返せよ。）

目的がまたひとつ増えてしまったが、武道家のやる気が上がってきたおかげで、なんとかこのダンジョンもクリアできそう。

その後、世界樹の葉を俺に使ってくれたおかげでここで生き返ることができた。

遊び人は「キングアックス」を入手することができたので戦闘外でハッスルダンスを踊っている。ハッスルダンスの効果で俺たちのテンションはだんだんと上がっていき、野生のモンスターとの戦いのはじめにはパーティー全員がハイテンションになっていた。

しかし、これが俺たちの不幸の始まりとなった。

野生のモンスターの名前は「げんじゅつし」。不気味な笑いを浮かべているキモイやつらだ。

こんな奴ら、ハイテンション状態の俺が魔法を一発打ち込むだけで余裕と思ったので、相手に「ライデイン」をうつことに。

??????????

なんだか頭が混乱する……。あふえ？味方わどつて？

そして気がつければ盗賊と武道家は感電死状態。

遊び人は運よく回避できたそうだ。

しかし、遊び人は俺が混乱している間、感電死状態の盗賊と武道家をもって敵の攻撃から避けていたため、苦戦をつづける。ようやく目が覚めた俺たときは、遊び人と俺はもう体力の限界におとっていた。

そこで遊び人と協力し、二人の死体をもって敵のグループから逃走。

そして今、後ろから野生のモンスターたちに追われているのだ。

ふう……。なんとか逃げ切ることができた俺たちだが、このパーティーの状況じゃ動くことができない。

力尽きかけの俺と遊び人は壁に寄りかかったまま座り込み、盗賊と武道家の死体を眺めていた。

ベホイミの使いすぎのせいで、俺の残りのMPは2しか残ってなかった。あとMPが1多ければリフミトが使えてそのまま脱出することができたのに……。

もうだめかな……と思った瞬間、俺のまわりに光が包み込み、MPが2から13に増えていた。

遊び人「あなたの為にしたわけじゃないんだからね……。」

どうやら遊び人が俺にマホアゲルをしたらしく、遊び人の残りのMPを全て俺にあたえてくれた。

俺は遊び人のツンデレをスルーしたままりフミトを唱え、やしろから脱出した。

キメラの翼でアルカンタ城に戻り、二人を蘇生したあと、反省会をひらくことに。

パーティー内の空気がやけに重い、まあ無理もない。見方の攻撃で壊滅の危機におちいったのだからな。

俺らは反省点を述べ、対策点としての結果、「げんじゅつし」のメタパニに気をつけること。

そして、あまり調子に乗らないこと。(強調)

反省会の後、各自で休憩をとらせることにした。
俺は宿屋にもどり、ベッドの中にもぐりこんだ。

ああ……自分が家で毎日寄生虫していたあのころに戻りたい……。

でも……

俺はぶつぶつ独り言を言いながらゆっくりと休んだ。

ゴーレムの甘くて、切ない恋の未来（シナリオ）（前書き）

サブタイトルとお話は似てて異なります

ゴーレムの甘くて、切ない恋の未来（シナリオ）

翌朝

着替えを済まし、宿屋のフロアに行くとみんなはもう集まっていた。そこでみんなのステータスを確認してみると、俺は一瞬目を疑った。ステータス

勇者 Lv22 フル装備 鋼のつるぎ

武道家 Lv22 フル装備 鋼の爪

遊び人 Lv22 フル装備 キングアックス

盗賊 Lv22 フル装備 鋼の塊（石）

そしてゴールドも8000Gあるジャマイカ。

どうやら俺が休んでいたこの一日で三人は濃密な特訓をしたらしい。おまけに各自でゴールドを集め、それぞれの武器を入手したそうだ。（盗賊の鋼の塊というものが気になるのだが・・・）

ステータスを見ている途中、武道家は俺のほうにくると

武道家「勇者さん、コレをどうぞ」と言いながら、細長い箱を渡してきた。

早速箱を開けてみると、その中には光輝く「聖なる剣」が入っていた。

盗賊「アツシら三人でダンジョンへ修行しに行ったのでゲスが、その時たまたま宝箱があったので、あけてみるとそれが入っていたんでゲス。」

嘘をつくな。

俺は盗賊のあるクセを知っている。コイツは嘘をつくとき、鼻をピクピクさせながら話してくる。
たぶんコイツらは、「聖なる剣」を目的としてダンジョンに行ってきたのであろう。

そのときの戦いでここまでレベルアップしたのか……。

あれ……なんでだろう……。目から変な汁が……。

俺はみんなから顔をそらし、涙を拭くと同時に気持ちの整理をしたあと、
みんなの準備が整ったのを確認し、俺たちはアルカント城をあとにした。

太陽の祠の中、俺たちはちやくちやくと進んでいっている。

これもみんなの努力のおかげといったところか。

「げんじゆうし」さえ注意しながら戦えばそこまで敵も強くはない。俺が見た夢に関することを探っていたうちに、とある部屋にたどり着いた。

扉を開けると、その部屋には大きな壁画があった。

その壁画には、暗黒の闇に太陽の光が差し込まれているような明るい絵が描かれている。

……ハッキリ言う俺は太陽が嫌いだ。

勇者活動をしている俺だが、元ヒツキーだったためか、今でも太陽の光を浴びることによって溶けてしまいそうだ。

武道家「この壁画を見ると不思議と元気になるような感じがしますね。勇者さん。」

勇者「……チツ」

武道家「ええ！？　なんで!?!」

そんなことをしていた次の瞬間、突如一体のバカデカイゴーレムが降ってきた。(盗賊の上に(笑))

ゴーレム「何故このやしろに入ってきた？ まさか娘の頼みで友人を取り返しにきたのか!？」

・・・ああ！ そんな約束していたなあ。

ということは友人をさらったのはお前のことか・・・。

ゴーレム「友人を返してほしければこの俺を倒していくがよい！」

そういうとゴーレムはいきなり俺たちに襲い掛かってきた！

圧倒的にそこらへんのザコモンスターと攻撃力が違う。かなり苦戦しているが、俺たちも確実に敵の体力を削っていつている。

終盤にかかると、敵は疲労で油断してしまったのか、足元の盗賊の棺桶につまずき、あお向けでコケてしまった。

そのチャンスを見逃さなかった武道家は、すかさずゴーレムに爆裂チョップを決め、ゴーレムを真つ二つにした。

その後、力尽きかけのゴーレムになぜ彼女の友人をさらったのか聞いてみた。

ゴーレム「ぐぐ・・・俺は・・・俺・・・は・・・

・・・
つたんだ・・・。」

)

•

•

)

なんだあのでっかい肉の棒・・・ (前書き)

変態という名の紳士

なんだあのでっかい肉の棒・・・

俺たちはゴーレムの話を詳しく聞いた。

ゴーレムから聞いた話を簡略にまとめると、

彼女と一緒にいた友人（男）に一目惚れをしたらしい。

ゴーレム（ウホッ！ いい男・・・。）

その後、彼女から男を強奪。

やしろにある地下牢屋に男を監禁し・・・。

アッー

そのことを話した後、ゴーレムは力尽き、風化してしまった。

今思うのだが、なんでこんな馬鹿なことをゴーレムにきいたのだから・・・。

ゾーマについての情報を聞けばよかった。

すると奥の部屋からパンツ一丁の男がかけ走ってきた。

あの変態モンスター「ごろつき」が現れた!!

と思いきや、パンツ一丁姿をした男はなんと友人だった(まあわかつてたけど)

友人(変態)「助けに来てくれたんですね!! ありがとうございますます!!」

いや、別に助けに来たわけじゃねーけど。

まあ、ここにはゾーマについての情報や俺が見た夢のことに關してはなにもなかったので、

俺たちは嫌々、友人(変)ryを連れ、リミフトでやしらから脱出した。

キメラの翼でアルカント城に戻ったのはいいんだが、颯爽と友人は彼女の家まで走っていった。

街人は変態がイカれていると勘違いをしたのか、街中パニックになつてしまった。

街人A「キヤー!!! 変態よー!!!」

街人B「うわああああ!!! こっちに来るなああああ!!!」

街人C「.....ポツノノ」

そんなこんなで彼女の家に行き様子を伺ったところ、二人はどうやら恋人の関係だったらしい。

それを知った武道家は、

武道家「ヒューヒュー!!! アツいねー!!!アツいねー。

涙拭けよ、武道家。

家からでるときに、彼女から助けてもらったお礼として、三つの入ったオレンジ色のボールをひとつもらった。

そのボールを7つ集めると、なんでも願いがひとつかなうらしい。別にそこまでほしくはなかったが、店で売ると高く売れそうだったので貰っておくことにした。

行きたいよ秋葉原(前書き)

聖地

行きたいよ秋葉原

アルカント城から出ようとした瞬間、一人の少年が街のへ飛び出していった。

ポーンと少年を見送っていた俺たちに後ろからおっさんの叫び声だんだんと近づいてきた。

叫びながらこちらに走ってきたおっさんは、俺らを見るなり意気切れになりながらもしゃべりかけてきた。

話を聞いたことによると、このおっさんはアルカント城に勤める大臣であるらしい。

この街の王子である、プルトン王子を探しているらしく、王子から目を離れた隙にいなくなっていたらしい。

どうせ、今俺たちを横切って行った少年が王子じゃないかと思いつながら、面倒くさいので断ろうとした時、大臣がボソツと、

大臣「見つけてくれたら褒美を……」とやってきた。

は？ 俺たちを誰だと思ってる？ 勇者ご一行様だろ？

人の手助けをすることは常識だろ、jk

心の中にあるワクワク感を抑えつつ、その場を後にし横切っていた少年を追うことにした。

横切った少年の特徴

・おかつぱの金髪頭

・小太り

・顔に多少のそばかす

・・・そして二次元チックな痛Tシャツを着ているということ。

特徴がインパクトだったため、当たり前のように少年を見つけることができた。

しかし、魔物の群れが王子を囲んでいる。

このままでは危ないと思った俺は一発ギラを唱えた。

モンスターが必死にもがいている。

見る！ 化け物がゴミのようだ！

王子「何をするんだ！ DQN共め！！

DQN？ つい一ヶ月前まで二ト暮らしだったこの俺が？

その後、俺は糞ガキにムキになっていたので武道家がその全体をまとめあげ、事情を詳しく聞いていた。糞王子が言うには、このモンスターたちとはネトゲで知り合った仲間たちらしく、今日はそのオフ会だったらしい。

王子「まったく、事情も知らずに口を挟むなんて。人間としておかしいと思うね。」

ああ、戦争がどんなものか教えてやりたかったのだが、武道家とその周りのモンスターたちが取り押さえてくる。

一瞬だが周りを見回した時に、盗賊とほかのモンスター同士でなにかマニアック的なことを熱く語り合っていた。

糞王子が抵抗してこようが、俺たちはすみやかに城へと連れ戻そうとしたとき、

モンスター「あの、ボスがいないと・・・僕たちどうすればいいんでs・・・」

勇者「あああん？」

モンスター「いえ、なんでもありません・・・(; ; ; ;)

城に糞王子を連れ戻したあと大臣が俺たちに感謝の言葉を申し、王子を回収用の檻にぶち込んだ後、何事もなかったかのように帰ろうとした。

勇者「おい、大臣。」

大臣「ビクッ！」

勇者「……褒美。」

大臣「……へ？ なんのこゝ……」

勇者「褒美（笑）」

大臣「……」

……？」

勇者「褒美じゃタボハゼがああああああああああああああああああああああ
あああああッ！！！！

数十分後

俺たちはスライムの冠をもらったあと、丸コゲになった大臣がいるアルカント城をあとにした。

城を出るとき、遠くからパトカーのサイレンらしき音が聞こえたので速やかにルーラを使い太陽の祠へと移動した。

太陽の祠にいる俺たちはこれからどうしようか会議をはじめた。

？

あれ？盗賊は？

武道家「まさか、まだあのモンスターと熱く語り合っているんじゃない」

会議終了。

会議結果・・・盗賊を探し出し、殺（ry

太陽の祠から歩いて約30分

さっきのモンスターたちの群れがいたところについたが誰もいない。たぶんほかの場所へ行つて、オフ会をしているのだろう。

こころあたりがあるとすると・・・

ネット・・・オフ会・・・喫茶・・・・・・・・！！

俺はすぐさまルーラをつかった。

ここは秋葉原

ここならたぶんいるだろう。さて、片っ端からネットカフェを回るか・・・。

ちなみに勇者さんは、この聖なる地に足を運んだことがあるため、ルーラでいけ（ry

俺が知っているネットカフェを15店ぐらい回ったとき、ようやく盗賊を見つけ出すことができた。

俺は新しく覚えた「イオナズン」のためしうちを試みた。

その後のことはご想像上にお任せします。(中略)

秋葉原からルーラで戻ってきた俺たちは棺桶を引きずりながら西の方角へと歩んでいた。

秋葉原を去る前に、風のうわさによると、ここから西の方角にある「ノーマの村」というところで、魔物と人間の戦があつたらしい。どうやら俺が思っていた以上にゾーマの侵略が拡大しているらしい。パーティー内ではおもぐるしい空気がただよっている。

半日後

ノーマの村に着いた俺たちが見た光景は……

言葉を絶するようなものだった。

エロゲじゃありません(前書き)

おちゃめすぎた遊び人

エロゲじゃありません

遊び人「酒だあああああ！　もっと酒もってこい！！　おほほほほwww」

魔物「女王様、ドンペリでございます。」

遊び人「ああん？　1本だけだとおろ？　10本もってこい！この下衆豚めツ！！」ピシャーン

魔物「アヒイツ！！　女王様あ！　もっとおしおきをおおおおおおおお！！」

勇者　武道家「……………」

3時間前

俺たちが見た光景は、魔物と人間が発狂しまくりながら楽しく酒を飲み散らかしていた光景だった。中では、人間と魔物の子供同士で遊んでいたり、魔物の芸などの演芸が開かれていたりした。

俺と武道家は啞然としたまま周りの様子を見ていたのだが、遊び人は目をダイヤモンドのように輝かせ、体が舞うように踊りながら街を歩いていた。

とりあえずその街で情報を搜索するため、別々行動をとることに。

集合時刻、俺と武道家は集まったものの、遊び人の姿が見えない。まあ予想がついたものの、俺たちは遊び人を探して……この有様というわけだ。

遊び人には手をやかされたが、なんとか店から連れ出すことができた。

遊び人「ヒック！　なんだよおおお……　もうちょっとだけ

えええおえええええ」ドボドボ

このアマ、いったいどれだけ飲んでるんだよ……。だが、自分の飲んだ分の御代は女王様ということでチャラになったことが不幸中の幸いというところだ。(体を売ってなかったらいんだが……。)

とりあえず、宿にとまった俺たちは情報をひとつにまとめあげ……と思ったが、本日の女王様がこんなんじゃないので今日はもう寝て明日になってからまた話し合おうということになった。

次の日

早朝に俺は目が覚めてしまい、誰よりも早く起きた……。と思いきや、ベロンベロンになっていた遊び人の姿が見えない。

俺は着替えを済ませ、遊び人をさがそうと思いきや、遊び人が俺の背後立っていた。

少しビツクリした俺に遊び人は、

遊び人「ちよつと……。付き合ってくれる？」と聞いてきた。

俺があ、ああ……。と返事をしたあと遊び人は朝日が差し上げる寸前の景色が見えるベランダに俺を招いた。

昨日の馬鹿騒ぎがあったとは思えないほどに、街は沈黙しており、聞こえてくるのは風になびかれる木の葉の音と、チュンチュンとした鳥の鳴き声だけだった。

遊び人「……。昨日はみつともないとこ、見せちゃったね。」

ああ、まったくだ。どれだけ俺たちに迷惑をかk……

遊び人「・・・ごめんなさい。 勇者さん」

そういつた遊び人は俺の顔に近づき、俺のほほに軽く唇をあてた。昨日あれだけ酒を飲んでいたクセに、なぜか酒の臭いがしない。

香るのは少し甘いミントな香り・・・。

このとき俺の頭の中はああ、歯磨きしたんだなあ・・・という冷静な考えがあったが、その思考は一瞬で消え、心の何かが揺れるような、言葉に表せることができない感情がこみ上げてきた。

遊び人は少しだけ笑みを浮かべた後、

遊び人「これは昨日の罪滅ぼしだから・・・／＼／」

と言うとその場から出口へと駆け走って行った。

そのときの俺は自分の焦点が定まらないまま、ボーっと立っていた。

思春期（前書き）

リア充爆ぜろ

思春期

……はっ！

夢かよ……。

(……しかも夢精とは)

俺のとなりを見ると、デカイいびきをかきながら爆睡している遊び人の姿があった。

準備が整った俺と武道家はこの女を起こそうとしたがとても手がつけられない様子だったのでそのまま放置して情報をさぐることに。

話は変わるが、ここの街はこの間まではゾーマの手下の魔物の軍勢と人間たちの争いが行われていたのは事実であるらしい。

それはかなり激しい戦だったらしく、両者ともども死者が続出。

短いようで重く長い死闘が繰り広げられていた。

ところが、戦の途中でのこと、一匹の光り輝くレティス(神鳥)が現れたそうだ。

レティスは激闘の中を一瞬で硬直化させ、暗く重苦しい空気を和らげ、暖かい光があたりを包みこんだらしい。

レティスの導きに従った人間はすんなりと和平交渉を望んだが魔物の群れは一筋縄いかなかったらしい。

そこでレティスが用意したものは「酒」とのこと。

天からの酒の雨を降らしたレティスはどこかへはばたき、その場を去った後、人間と魔物は和平条約を結んだそうだ。

俺がゾーマの情報を探しつつ店外を歩いていたら、店の路地裏で何か光輝く羽を見つけた。

あまりにも美しい羽だったため、つい見とれてしまった俺はその羽を拾い、

帽子のアクセサリーとしてつけてみた。

（……うわ、めっちゃカッコイイ……／＼／）

今思うと、中二病バリバリでめっちゃ恥ずかしいと思う。

手分けして情報を探った結果、ここから東にある「ラドンの塔」にゾーマの手下がうろついているらしい。

この街では、和平条約が結ばれているため、街中での魔物と人間の争いは禁止されている。

とはいえ、自分の周りに魔物がたくさんいると落ち着けないな。

翌日

遊び人がようやく復帰し、俺たちはラドンの塔へ向かうことに。

武道家が昨日の探索でキラーパンサーと友達になれたらしく、そのおかげで俺たちの足として今ではやくにたっている。

大地を疾風のごとく走りつづけると、間もないうちにラドンの塔へとついた。

ここには最上階に眠る秘宝があるとのこと。胸いっぱいワクワク感を覚えつつ、ラドンの塔に入っていこうとした瞬間、

キラーパンサー「おい、ファイターさんよお。ここまでつれてきてやったのに、例の報酬を忘れちゃあいねえだろうな？」

武道家「あ、ああ。ちよつと待ってください。」

すると武道家はバックからキャットフードをとりだした。

武道家「最高級の濃蜜デリシャスキャッツでございます」
キラーパンサー「へへ、これさえくれればまたいつでも足になってやるよ。」

そういつとキラーパンサーは風とともに一瞬で駆け走っていった。

勇者「武道家、あのキャットフードはどれ位するんだ？」

武道家「え、えっと・・・(汗

20000G くらいです・・・。」「

二つの棺桶を持ちながらラドンの塔を上がっていくのはやはり荷が重たかった。

キャットフードの金は全部武道家のへそくりではらっていたらしい。そんなお金があるならもつと役立つものに使えよ・・・。

へそくりのことでふと思ひ、遊び人の方を見つめた。

・・・遊び人が目をそらす。

あとで遊び人にはじっくり聞かなくてはならないことがあるようだな。

棺桶を盾にしながらも魔物たちと戦闘を繰り広げる。

しかし、やっかいなことに「動く石像」というやつがあらわれた。

コイツが踏みつけ攻撃をしてくる際、一瞬だけ見える布着の中身がみえる・・・。

それを見てしまった遊び人は気絶をしまい、まともに戦えるのは俺だけとなった。

いくつもの苦戦（いや、ただ逃げ続けていただけなのだが）を乗り越えてようやく塔のてっぺんまでたどり着くことができたが、そこでまちかまえたのは俺の期待を裏切るようなものだった。

塔の最上階にある部屋の中、あたりはボスの残骸が飛び散っており、部屋の中心にはどうやら別の勇者のパーティーが宝箱の中にある秘宝を手にしていた。

別の勇者「ん？君もこの宝物を狙ってきたのかい？でももうこれは僕のものだから渡すことはできないよw」

僧侶「あらあ、残念だったわねえw」

戦士「wwwwwwこいつポカーンっしてしてるぜwwww超ウケルッwwww」

魔法使い「オイこいつら勇者以外全滅してるぜwwww勇者のクセにまだザオリクを覚えていねえのかよww」

このパーティーの高笑いも塔を駆け巡る。

勇者「・・・ボソボソ・・・」

別の勇者「ん？何か言った？」

勇者「リア充爆発しろおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！」（泣）

私の怒りと己の無能に対する悲しみ、そしてなにより、充実した完璧なるパーティーへの嫉妬が俺を覚醒させた。

次の瞬間、
ラドンの塔は・・・

崩壊した。

大人への階段（前書き）

ロリコンで何が悪い

大人への階段

気がつけば教会にもどっていた。

神父「神のご加護をあ」

勇者「ちくしょおおおおおおお！

何が神様のご加護だ

よおおおおおおお！

俺は神父の頬に爆裂拳をぶちかましたあと、教会から外にでた。

泣いた。泣き叫び続けた・・・負け犬のように。

崩壊したラドンの塔は村中の噂になっており、ゾーマが攻撃を仕掛けてきたという噂が流れていた。

この村からひとまず離れ、別のところでパーティーを復活させることに。

ほかの奴らには、今までであった経歴を何も話さなかった。そして、

ほかの奴らも聞いてはこなかった。

俺たちはこれからどうするか考えようとしたところ、久々に盗賊が俺に話しかけてきた。

盗賊「そろそろ遊び人を転職させてはどうですか？」ヒソヒソ

おお！ そうだな！

遊び人はもうとつくの前に20LVを越しており、十分に自分の道を悟ることができるところまで成長していた。

少しだけ、俺は鼻が高くなった。

転職士「そなたの新たな道を開き、この広大な世界に羽ばたくがよい!!」

テレテレテーテー

賢者「・・・ふう。終わった・・・のかな？」

白い聖堂服を着た遊び人、いや賢者がそこにいた。

今までいくつもの戦いのなかでサボったり遊んでいたりしていた遊び人だったが、

賢者になってからは、自分から進んで戦ってくれるようになった。

おまけに、ザオラルやメラゾーマといった上級者魔法などを使えるので、今となっては

俺達のパーティー内では救世主のような存在となった・・・が

賢者が活躍する一方、

武道家がなにやら悔しがりつつ、賢者に対してものすごく嫉妬していた。

武道家「くそっ！　なんで今までだらけていたアイツが突然こんな

強くなるんだ？

俺は今まで散々モンスターと戦ってここまで成長したのに・

・・・」

賢者の力は武道家よりも上まっております、主力のアタッカーになっているのは賢者になっていた。

盗賊「あの、勇者さん。」

勇者「どうした盗賊？」

盗賊「……なんで私の装備品を売るのでゲスか？」

勇者「……盗賊、お前は装備品と命、どっちが大切だ？」

盗賊「それは……命でゲス……。」

盗賊の武器以外全ての装備品を売って、俺は飢えでかわいそうな少女を助けてあげた。

おかげで世界樹の葉を10枚も買ってあげることができた。少女は当分は生きていけるであろう。

武道家「勇者さん、あの子世界樹の葉をエルメスのバックで売っていたような気が……。」

勇者「そんなことはどうでもいいだろ、それより見たか？ あの子の表情、満面の笑みでうれしがっていたじゃないか。」

武道家「は、はあ……。」

後ろから賢者が軽蔑な眼差しで俺を見ていたが、気のせいであろう。

少女とお別れした後、船乗り場でうろついていたところ、賢者に船乗り兵のやからが群がってきた。

船乗り兵A「ヒューおねえちゃん、俺達と一緒に船旅でもしねえか？w w w w」

船乗り兵B「なあなあ、いいだろ？ 悪いことはしねーからw」
船乗り兵C「船酔いなら俺が全部受け止めてやるよw」

賢者は杖を天にかざし、呪文を唱えようとした瞬間、

盗賊「やめろ！！」

盗賊は賢者と船乗り兵の間に入り込み、場の空気を一瞬だけ硬直させた。

盗賊「これ以上賢者に一步でも近づいたら・・・許さないからな！」

賢者「え？(キモ・・・)」

船乗り兵A「はあ？ さつさとどけよおっさん 気持ちワリーんだ

よ。」

盗賊「う、うるさーい！！」

盗賊がダガーナイフで船乗り兵に襲いかかろうとした瞬間、突如天から落雷があたりにふりそそいだ。

船乗り兵達と盗賊に直撃するも盗賊だけはなんとか虫の息で生きていた。

???「おゝ悪い悪い。　ワシの部下にあてたつもりだったんじやが・・・。」

その声が聞こえると次の瞬間、船乗り場に停泊している大きな船から一人のおっさんが降ってきた。

でかい図体で、立派な白いひげを生やしたこのおっさん、どうやら

この船の船長らしい。

ムドオン「ワシの名前はムドオンだ！ 部下が迷惑かけちゃってます
まんかったな！！ガハハハ！！」

アツぐるしいおっさんだが、昔は海を渡る英雄とよばれていた男だ
ったそうだ。

そんな男にゾーマのことについていくつか聞いてみたところ、なん
とゾーマの居場所を知っているとのこと。

しかし、場所を教えてもらう代わりに、あるひとつの条件を満たさ
なければならなかった。

ムドオン「今のお前達じゃあゾーマと戦うのは不可能だ。」

条件 Lv40 越え（パーティー内全員）

たしかに、今の俺達ではゾーマと戦う以前にたどり着くことさえで
きないであろう。

勇者 Lv32

武道家 Lv30

賢者 Lv29

盗賊 Lv24

これを機に、俺たちは地獄の強化訓練を始めることにした。

山登り（前書き）

今回は、勇者たちの楽しい楽しい山登り

山登り

ここはハードマウンテン

盗賊「おべえ r t r r t つれおいいーじゅおいれうえ r」ドボドボ
勇者「盗・賊う・しっかり・しろ！」

賢者「もうやだあああああ！！ 帰りたいよおお！！」
武道家「うおおおおおお！！」

ながいながい山道を登り続けて、ようやく第一関門まで到達することができた。

途中モンスターを倒しながらも、自分達で考えた特訓メニューを繰り返しつつづけてきた。

盗賊は年のせいか、かなりへばっている。 盗賊（37歳）
しかし、この強化訓練を始めてから盗賊はなんと一度も死んでいないのだ！

そのおかげで、パーティーのLv上げも順調に進んでおり、予定よりも早く条件をクリアすることができるようだ。

しかし、四日目の朝
賢者の姿が見当たらなくなっていた。

盗賊の得意技「とうぞくのはな」を使い、その後あっけなく賢者を見つげ出すことができた。

賢者は泣きながらうずくまってる。

無理もない、女にとっては苦痛なことだろう。しかし、俺はここで心を鬼にし、

賢者を無理やりでも引っ張っていった。

五日目

そろそろみんなの体力にも限界が近づいてきたようだ。

盗賊は吐き出すものが尽きてしまい、とうとう胃液を吐き出してしまつたという惨事が起きてしまった。

盗賊だけではなく、武道家もこぶしが血まみれになっており、全身の筋肉がはれ上がっていた。

俺も正直、「ゾーマなんてどうでもいいや」なんて思ってしまった。

六日目

武道家が倒れてしまった。全身の筋肉は激しく膨れ上がっており、熱まで出していた。

仕方なく、俺は棺桶の中にヒヤドをぶち込み、その中に武道家を入れてあげ、棺桶を引っ張りながら山を登った。

賢者も反抗する力も尽き、精神状態が危ういまま山を登り続けた。

盗賊は死に物狂いで後ろから付いてきている。

明日が最終日、はたしてみんなは無事に強化訓練を乗り越えることができるだろうか。

ラーメンはやっぱり醤油味 (最終話) (前書き)

第一章 完

ラーメンはやっぱり醤油味 (最終話)

二日後

ムドオン「おい！そこに荷物おろして置きよ！」

船乗り兵A「はい！」

ムドオン「よし・・・そろそろ来るころだな。」

ビュウウウウウウウウウウウドシッ！！

ムドオン「待つていたぞ、若き勇者ご一行よ。見違えてきたようだな。」ガハハハ

ルーラで飛んできた先に待ち構えていたのは伝説の英雄さんだった。さっそく俺達のステータスをムドオン船長に見せた。

ムドオン「・・・よくがんばったな。」

勇者「約束通り、ゾーマのところまで案内をお願いします。」

ムドオン「待て待て、あわてるではない。まずお前らは飯を食ったか？」

盗賊「そういえば・・・」ギョルルル

ムドオン「ガハハハ！ 腹減っては戦はできぬ！」

「この街にある絶品のラーメン屋があるから、これをもつて行って腹を満たしてきな！ 話はそれからだ！！」

そういうと船長は俺に10000Gを渡してくれた。
ありがとう、船長。

ステータス

勇者 LV49

武道家 Lv 47
賢者 Lv 46
盗賊 Lv 48

のれんをくぐったその先はとても良い臭いが充満していた。
古臭い豪華な場所とはほど遠いが、とてもなじみやすい環境だった。
これが最後の食事になるかもしれない。
ゾーマまであともう少し、決着前日の晚餐に、

「乾杯！」

W W W W W W W W W W W W W W W
W W W W W W W W W W W W W W W
W W W W W W W W W W W W W W W
W W W W W W W W W W W W W W W

みんな決戦前日だというのに、なぜか笑いと涙が絶えなかった。
みんんな泣く泣くよよ

客A「すみません、テレビつけてもいいですか？」
店員「あ、いいですよ^^」

ピッ

ニュースキヤスター「臨時ニュースです。」

今日未明、勇者「ああああ」の手により、魔王ゾーマは死亡、世界は平和になりました。」

勇者 盗賊 武道家 賢者

「えっ？」

第一章

完

ラーメンはやっぱり醤油味 (最終話) (後書き)

とりあえず、第一章はここまでです。

第二章はただいま製作中のため、いつ投稿するかわかりませんが、なるべくはやく投稿するよう、心がけます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2464o/>

ダメな勇者が旅立つことになった（DQ）

2010年10月12日13時55分発行